

六号欄

雑誌名	龍南
巻	2 0 6
ページ	9 7 - 1 0 1
発行年	1928-06-15
その他の言語のタイトル	六号欄
URL	http://hdl.handle.net/2298/9008

▼▼六號欄▲▲

讀書調査報告

—文藝部委員—

入學直後の諸君の讀書傾向を知るため、例年の讀書調査をやつてみた。

流石に三四郎の後輩たちは漱石先生の愛讀者であつた。而も今年には岩波の全集が大半を占領してゐる。新入生諸君は大体に於て漱石全集の愛讀者である。

「坊ちゃん」や「猫」から「心」「行人」「明暗」と云う風に進んで行つた漱石先生それ自からの如くこの愛讀者たちも一步一步進歩して行く事を豫想するのは喜びた。

次に著しい傾向は全集ものである。所謂圓本である。現代の學生はよかれ、あしかれすばらしい藏書家である。世界文學全集。

日本文學全集。兄たり弟たりがない有様。次に近代劇全集。明治大正文學全集。がこれに次ぎ、大衆文藝全集の努力も仲々あなどりがないものがある。長篇小説全集もかなりあつた。それから芥川龍之介全集。

全集。全集。全集。全集萬才である。こんなに全集を喰ふと胃病になる。僕はひそかに心配した。と同時に僕は書籍棚の隅に白い埃にまみれた全集先生を想像してゐた。これは又すいぶん失禮

な想像ではある。

次に個人について見る。漱石先生、龍之介氏、それから樗牛、啄木、小説家でなくて鶴見祐輔氏の北米遊説記等の隨筆がかなりあつた。鶴見氏を書いたらムツンリーニ氏を思ひ出した。ムツンリーニ傳はかなりよまれてゐる。鶴見氏と伯仲の處である。倉田百三氏。吉田絃二郎氏など少しあつた。菊池寛。久米正雄。谷崎潤一郎……等所謂流行作家は殆どない。それかといつてプロレタリア作家のもの。新感覺派のもの。もない。これは珍しい現象だと思つて考へて見ると、全集にみな入つてゐるやうである。重寶なる全集かな。ここにも又全集萬才！である。

新しい所では、ロマンローランから進出して、アプトン・シンクレア。前田河廣一郎。更に藤森成吉氏も少しはある。

次に雜誌をのぞいて見る。

改造と中央公論が最も多い。

一昨年の調査の時「英研」。キング。文章俱樂部が主位を占めたに比べて大いに心強い氣がした。

次に多いのが「文藝春秋」。それから「新潮」。と進んでゐる。倉田氏の「生活者」。もあつたが「思想」。はまだない。

一方大勢力はかなしい「考へ方」。であり「愛蔵と學生」。であり「中等英語」「英研」。である。「雄辯」「キング」。「現代」。も相當あつた。少年、幼年クラブが一二あつたのは勿論冗談であらう。理科の方ではさすがに科學畫報が筆頭である。科學知識もすぬ分あつた。新青年がかなり多い。

「昆虫記」。「自然科學大系」。も理科である。

「詩」では「パンテオン」。「近代風景」。

「歌」とか、「俳句」。の雑誌が一つもなかったのは不思議であるけれども忙しい試験準備中に、全集を三つも四つも或は五つも取る人の多かつたのは感心してしまつた。

最後に。書物は食物の様なものである。食ひすぎると下痢をやる。食はれば腹がへる。又いくら食つても消化しなければ營養にはならない。等々……………。

これは勿論おせつかいにすぎない。

筆を擱くにあたり皆眞面目に答へて下さつたことに感謝を表しておきます。——以上

—(五月四日 永積生記)—

がらくた手帳より

竹内孝雄

「何かしら僕にしつくり来るよ」。自分と云ふものが分らなくなつたらいつもこのことを思ふことにしてゐる。

人間は物を云はればならないことを不幸がる程不幸なことではない

「青い鳥」を求めて一生走り廻はるエネルギーを有する人は幸福である。

人は何ぞ泣くのだらう。泣くことは魂の洗濯になると云ふことだけは知つてゐる。

戀は詩的な性慾と云ふよりも、戀は全人格の完成のためと云ふよりも人情主義の方がいい。

私は自分の肉体に愛着を感ずる。瘦せて來るのが痛ましい。それは本當だ。

親子の愛は動物的本能であつても美しいと思ふ。

奥歯を噛みしめてゐる人は少いものだ。

近頃の青年はもつと虚榮心があつて欲しいと私も思ふ。

あつさり自己を投げ捨てゝ、流れる水の如しとするか。

けれど、「か」づくしの世界は永く／＼まつはらうとする。

「か」づくし

個人が社會か、
Solten が Sein か

獸が人間か、神か

兎に角「仕事だ。仕事だ。」か「つくしの世界の續く限りは。」

詩集の紹介

安部 實

装釘に意を用ひず、單に大量生産を主眼として生れた所謂圖本全集も近代劇全集の出現によつて書物の装釘に意を用ゐる様になつた。該全集の版本第一書房は此れ以前既に書物の（殊に詩集の）装釘に大なる注意を拂ひ、且つ之れが進歩發達に努めてゐたのである。

考ふるに、書物はその内容さへよければ他はどうであつても構はない、といへば唯それまでの事であるが、然し我々が書物を手にとつて先づ見るのは其装釘である。素晴らしき装釘美を有する本こそ我々に大なる快感を與へ、好印象を與へ、其の内容を讀みて更に讃嘆する書物こそ我等が日頃渴望するものである。

私は數多き第一書房の装釘美豊かな詩集中より最近出版された「萩原朔太郎詩集」の紹介をせんとするのである。

萩原の名は野口、西條等程著名ではないかも知れぬ。だが彼の詩の如何に卓越せるかは詩を味ひ得る者の既に充分知つてゐることである。誠に彼の詩は美しく、その著眼もすばらしい。然し徒らに珍奇な詩がすぐれてゐるのではない、味はつて行く中何處

からか自分の心を掴まれる様に感じる時、其の詩には尊い價值があるのである。

鬱蒼としげつた森林の樹木のかげで

ひとつの思想を歩ませながら

佛は蒼明の自然を感じた

どんな瞑想をいきいきとさせ

どんな涅槃にも溶け入るやうな

そんな美しい月夜をみた。

「思想は一つの意匠であるか」

佛は月影を踏み行きながら

がれのやさしい心になづれた。

— 思想は一の意匠であるか —

詩をよみて書をふせ、暫らく考へさせる所に、又考へて後微笑を浮ばせる所に彼の詩才が偲ばれる。

これは誠に美はしき詩集である。

或る話

岡田直介

酒でも飲まなきやヨウ壺まるかい。婢アなんか吠えさしときやいゝんだ。だがなア兄弟は。まあ聞いて呉れ。話しウアこうなんだ。

何時もてくる俺がその日工場が退けてから柄にもれえんだが電車

に乗つたんだと思ひね。潮時ぢやあるしその込み様つたらとて
もひでね。折角腰かけちや居ても身動き一つ出来アしね。それ
でもまあいいこまつて、ちつとしてたら車掌の奴が俺の前に來て
「煙草は御遠慮下さい」つて云うんだらう。可笑しなことを云ふ
奴郎だと思つて顔を上げた俺の前に立つてる奴がふかしてやが
るんだ。あんな奴が紳士つて云ふ奴なんだらう俺なんぞ觸つた
こともれえ様ぢ洋服を着やがつてな。そいつが車掌にそう云はれ
ると流柿にかぶりついた様な顔をしやがつてぶつ／＼云ひながら
捨てやがつたよ。あいづらは金さへありやアどんなことだつて出
來ると思つてやがるんだ。人の前ぢや紳士様でござるのなんのと
云ひやがつて裏に廻りやア酒は飲むばくちやア打つ女の尻は追ひ
廻す奴よ。酒を飲んでばくちを打つて女の尻を追ひ廻すのが紳士
なら俺なんか立派な紳士様だ。なあ兄弟えそうぢやねえか？俺だ
ちつて電車の中で煙草すつていけねえ位ア知つてらアな。それ
にまるで×××の様にふんぞりかへつて煙草をくわへて済まし込
んであやがるからな話しにもならねえやつさ。なににッそれから
どうしたんだつて？そゝそれから先が嫌大明神のお吠え遊ばすつ
て譯よ。

そゝその奴郎が捨てやがつた煙草をひよいとのぞいたらき、金口
ぢやねえか。さあ堪られね。煙草ときたらおままよりも好みな俺
だ。それでもバツトせい／＼朝日位しかお口に召したことねえ
俺様だ。そそれに癪に障るぢやねえか。そゝその煙草の火が消は
てないで、煙の奴郎までが俺の鼻をめぐけてやがるんだ。

な、なんだつて？そゝそれでおめねそれをひ、捨つたんだなんて
云ふのか？め、めんぼくねえ話したがひ、捨つてやつたんだい。
エ、ッ酒だッ。焼酒を買つて來いッ。焼酒だッ。兄弟え嫌の奴ア
まるで野良犬みたいに餓鬼をひりくさるし工場ぢや朝つばらから
がみ／＼叱鳴りつけられててんてこまひだ。兄弟え、俺達ぢやア
これぢやア、ちよつと人間ぢやねえな。あいづらがふかす葉巻一
本ぢやい、一日たんまり食へるんぢやねえか？、フン馬鹿にして
らア。

まゝい、や、な、なる様になつてくや婆婆だ。

お太陽様か照つてござらアさあ兄弟ね、まあ一ばいやるねえ。

(一九二八、一、五)

春日斷想

緒方茂夫

生！個々の人間が幸福を捕捉せんとする努力の過程である。そ
してこの努力の過程は恐らくは多くの場合未完成のまゝで終つて
了ふ何となれば結局幸福は誰かが云つた様に常に自己以外の所に
蹕つてゐるからである。これ實に人間の持つ最高の悩みであり濟
度し難き宿命ではなからうか。

×

×

純を常に人間の日常生活の基準としたい。だがこれは癡言に等
しい。純こそ實に多くの場合嘲殺し默殺されてゐる。

× 氣違とは人間の感情の白熱状態である。

× 我々は冷却があまりに速かなる爲に世人は所謂狂人と區別する。

× ×

成功とは實に漠然としたものであるが免に角に世間一般に云ふ成功は各人の生活内に据ゐたスウィツチを世の種々な懷舊に對して如何に巧く切り得たかといふのである。だがスウィツチの切方が巧いからと云つて嚴格な意味に於ける人格的價値が必ず伴ひ得るとは斷言出來ない。

× 批評は結局假定にすぎない。

× ×

× 現時の文壇は沈滞してゐるとは誰しも口にしてゐる。この沈滞の中に時代は大衆へと呼ばはつて一新機軸の如く人目を幻惑して所謂大衆文學なる粗品の濫造が初まつたが此粗品が果して現代人の切戻の要求であらうか、所謂大衆文學は文學史上の突然變異にすぎなく早晚大衆から見捨てられて了ふ時期が来る様な氣がする

× ×

× 日本は古來から農業國である。然るに農民の生活を描いた文藝作品のあまりに稀なる事は不思議で堪らない。

× ×

此頃の婦人雜誌の小説の全般的に低下してゐる事には一驚を喫する。否！その雜誌そのものゝ低下を嘆する前に先づその需要者

たる婦人の惡趣味を責めなければなるまい。勿論これらの低級小説を默殺する人も偶にはあらうか需用者全部があるとはどうしても思へない。成程服裝はより近代的、感覺的であらうがその服裝の下の實質はこれに反比例だと考へては實に苦笑の限りだ。』